

Title	いかに「死」を受けとめたか--がん患者遺族の体験に学ぶ--(Digest_要約)
Author(s)	井藤, 美由紀
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2014-03-24
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k18350
Right	学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要旨は2014-04-01に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

学位論文の要約

タイトル：いかに「死」を受けとめたか—がん患者遺族の体験に学ぶ—

井藤 美由紀

本論文は、末期がん告知をされた家族を介護し看取った人々の体験談を通して、日本ではほとんど公に論じられてこなかった、死に逝く人を支える経験の多様な側面を伝え、看取りの文化の再構築に向けて一步を踏み出そうと試みたものである。

序論は、今、なぜ、「いかに『死』を受けとめたか」を、遺族の体験に学ぶことが重要なのかを論じたものである。

第1章では、臨床分野における悲嘆（grief）研究の歴史を概観し、ジャンケレヴィッチ由来の「二人称の死」の定義を、悲嘆反応の有無に基づいて定義し直し、本論文では「死」と表記することを明確にした。

第2章では、まず、現在日本で終末期医療政策が直面している問題—多くの高齢者が自宅での最期を望みつつ選ばない最大の理由が、将来的に起こることが予期される心理的負担感であること—to言及した。次に、本論文では、看取り経験のない多くの人々の、現実を知らないことから来る不安感を軽減するための方策として、遺族調査で聴き取った体験談を土台に、多様な視点から死に逝く人を支える営みの側面を描き出すことを明らかにした。また、本章では、先行研究として、臨床分野で蓄積されてきた「悲嘆研究」の動向を概観し、中でも「予期悲嘆」研究の知見と、近年の国内の先行研究を批判的に論じた上で、「人間科学的研究」として予期悲嘆を探究することの重要性について論じた。

本論は、Ⅱ部構成となっている。

本論第Ⅰ部「調査の概要」では、本論文執筆に先立って実施した遺族インタビュー調査の概要と研究の方法を説明し、全調査協力者の基本情報と特徴を報告した。

本論第Ⅱ部「現代日本の看取りの諸相」は、3章で構成されている。

第1章「『死』の否認に起因する諸問題」は、2節からなり、第1節は、「親類縁者の予期悲嘆」を採り上げた。

Rando は、患者と家族に限らず、患者を取り巻く多くの人々が予期悲嘆を経験することを指摘しているが、国内の予期悲嘆の先行研究の大半が、家族と患者を対象としたものであり、それ以外の関係者については、触れられていない。そこで本論文では、親類縁者が主介護者を、精神的に追い詰めたケースを紹介し、親類縁者が患者の「死」を否認していたことを指摘した。続いて、医療関

係者の間で流通している「遠くから来た親戚」という隠語を紹介し、「遠くから来た親戚」が、「公認されない予期悲嘆」を経験している可能性があることを論じた。

第2節では、「病名が認識できなかった家族」について論じた。

「病名告知」が、患者と家族に強い精神的打撃を与えることは周知の事実であり、「いかに告知をするか」を論じた先行研究は少なくない。しかし、告知時に、病名が正しく伝わらなかったことが、患者や家族に及ぼす悪影響についての詳細は不明である。そこで、本論文では、告知時に病名を正しく認識できなかった家族が、患者の病状が急激に悪化しても「死」を予期できず、医療関係者とのコミュニケーション不全も重なり、結果的に家族全員が心身を病む状況に追い込まれた事例を紹介した。そして、本事例における、終末期介護に関わる関係者（患者・家族・医療関係者）間のコミュニケーション不全の実態を詳細に検討し、根本的な原因として、関係者各人の修正されない「思い込み」（≡認知バイアス）が複合的に作用していたことに言及した。

第Ⅱ部第2章「余命告知の副作用」では、はじめて主介護者として看取りを経験した3名の看取りの様相を詳しく紹介した。その上で、死別2-3年後に各主介護者が、当時のことをどのような経験として捉えていたか、また、自分自身の最期についてどう考えていたかを検討し、「主介護者として看取った人は、迷惑をかけられていたと見なしてよいのか否か」を考察した。

厚生労働省の実施した調査では、多くの高齢者が終末期介護に対して「家族に迷惑をかける」ことを予期し、心理的負担感を感じているという結果が示された。しかし、国内の予期悲嘆に関する先行研究を見ると、在宅で末期がんの家族を介護し看取った人の体験を分析した研究の多くが、家族介護者の患者に対する思いの強さと献身に言及しており、患者が心配するほど、家族は「迷惑」だとは思っていないことを明らかにした調査研究も発表されている。ただ、患者と家族の人間関係によって、家族の介護にかかる熱意が違うことを指摘した研究もあり、家族と患者の人間関係の質を不問にしたままで、家族の介護負担感を論じることには限界があることが示唆されている。

そこで本研究では、末期告知前の患者と主介護者の人間関係の質に着目し、関係性が異なる3名の主介護者の予期悲嘆を探究することにした。すると、いずれの主介護者も、余命告知によって強い悲嘆反応が生じ、それを機に患者との関係性が新たな次元に突入していたことが分かった。その後、各主介護者が経験した予期悲嘆の様相は様々であったが、どの主介護者も、突き動かされるようにして患者中心の生活を送り、患者を支えるために奔走したことが話された。どの人も、色々大変なことや辛いことを経験していたが、それらを患者に「迷惑をかけられた」という文脈で話した人はおらず、死別2-3年後の調査時には、悔いよりも充実感の方が大きく残っていることが窺えた。

ただ、いずれの主介護者も、自分の最期については、まず、他者に「迷惑をかけたくない」「迷惑はかけられない」というところから思考が始まる。初めて家族を看取った遺族達は、末期告知によって、それ以前には想像もつかなかった変化が自分の中で起こり、突き動かされるようにして患者中心の生活を送るようになった。しかし、誰も、自分に死期が迫った時、身近な人に同様の変化が起こることを前提にして、自分の最期を考えようとはしない。内発的な変化は、他者が強要できるものではないことを、経験的に知っているからであろう。そして、経験者だからこそ、まずは「支える人の大変さ」を慮った発言をするのだろうという結論に至った。

第Ⅱ部第3章『看取りの文化』のエッセンス」では、看取り経験豊富な主介護者の看取りに注目し、介護負担感に影響を及ぼす文化的要因について論じた。

第1節「死に逝く者の作法」では、最初に、長男の「嫁」が、自分に辛く当たって来た姑の主介護者となる覚悟を決め、深い葛藤を経験しながら看取った事例を採り上げ、「嫁」がどのようにして介護負担感に対処していたか、また、「姑」がどのように「嫁」の奮闘に応えたかを詳しく紹介した。

続いて、「老親の世話は、長子や長男の嫁がするものだ」という社会的慣習に従って、自我を抑えて介護役割を果たした人の中に、看取り後、人知れず深い葛藤に苦悩したケースがあることを報告し、主介護者に、本当に「迷惑」をかけていた患者の特徴を明らかにした。

最後に、長子や長男の嫁に、介護役割を課す社会的慣習を生み出した文化は、死を覚悟した人が、遺される人々の心に肯定的な印象を鮮やかに残して逝くための身の処し方も、内包していたことに言及。筆者はそれを、「死に逝く者の作法」と名付けた。

第2節「家族に継承される『看取りの文化』」では、介護苦概念に反発や違和感を表明した主介護者に注目した。

ハワイで実施された予期悲嘆の比較文化的研究は、欧米（キリスト教文化圏）出身者にとって、終末期介護がストレスフルであることは自明であるが、日本や中国出身者は、そのような認識を示すことを社会が容認していないと考えていることも明らかにした。この研究から、終末期介護がまさにストレスフルだと捉える思考は、キリスト教文化圏由来のものであるという仮説と、欧米とは異なる宗教文化的基盤がある日本や中国では、終末期介護に対してそれとは異なる捉え方をする思考が普及していた可能性が浮上した。

そこで本研究では、介護苦概念に反発した主介護者を採り上げ、その人の死生観の形成に影響を及ぼしたと考えられる生育環境について探究した。その結果、親戚関係の付き合いが非常に濃密な家庭に育ち、もの心がつく前から、日々の暮らしの中で神棚や仏壇祭祀、死者供養を大切にする習慣を刷り込まれていたことや、10代の初めに経験した祖父（或いは祖母）との死別前後のことを印象

深く覚えていたこと等が共通要素として浮上した。最後に、介護苦概念への抵抗感の由来として、家族や周囲の人達と共有している民俗宗教的他界観や靈魂観が育んだ観念について論じた。

結論では、これまでの議論を概観したうえで、「看取りの文化」の再構築と本論文がどう関係するのかを述べ、これから下の世代に看取りの文化を伝えていくために何が大切なのかを論じて締めくくった。